

---

# 義手と練成の問題

逆叫

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

義手と練成の問題

### 【Zコード】

Z0627F

### 【作者名】

逆叫

### 【あらすじ】

虚空から物質を作り出す、鍊金術師と謳っていた少女は、成り行きで腕を無くした少年の監視をすることになる。更に、感情と利害が入り混じった成り行きで、彼の夢見るバンド部を創部することになる。ちょっとカオスな学園物です。

私の様な存在が生まれたのは、創造主の意図か、人間の自惚れか。チカラの存在を知つたのはいつだつたろうか。両親が蒸発し、独りぼっちになつた頃だらうか。独りぼっちになつたのはいつだつただろうか。

物心ついたころから。

そのチカラから、無限といつてもいいほどに溢れ出でてくる知識、情報、感情。生ける神の様になつたかと錯覚するほど私は脆かつた。自意識の隙間にあるチカラ。成人した人間が所持している知識と同じ量の知識が、幼子であつた私にどれだけの負担をかけたか。その負担が私を壊した。

人は私を鍊金術師と呼ぶ。原子と原子を混ぜ合わせ、全く異なる原子を作り出す学問、それが鍊金術と呼ばれるらしい。失敗しても飽きずに努力を重ね、ついに実らず科学という人類を進歩させたか、衰退させたか分からぬ対象に逃げ込んだ。

そうして考えると、私はそうした人間の欲望の結晶だとしか思えない。自分のそう思つた物質を作れる。練成できる。これを知つてしまつた一部の人間は、私を鍊金術師と信じる。

私はそうじやない。信じていない。私は人間だ。

子供が受け入れられるはずの無い量の情報を飲み込んで、是認してしまつた私に常識は通用しなくなつてしまつた。無垢に自分を偽らない、子供の心は失われてしまつた。

無愛想だと思われた。私は謙遜されていく。しかし、私は当然の反応だと思ってどうしようもない。

無知はどうしようもないくらいの罪。その罪は重すぎて逆に罪と認められなくなつてしまつ。私は、誰かの操り人形としてこの世に召還されてしまつたのに過ぎなかつた。

ある日異空間に迷い込んだ。パラレルワールド。誰も居ない。静かな街。私の与えられた知識の中には存在しない。誰も知らない世界。

そこに存在するのは、元居た世界では考えられない情報。平和と平穏を望んでいる大半の人類にとつては残酷な事実。

それを呑みこむのは辛かつた。

弱いものは自然淘汰され、強いものが上にのし上がる。強いものは更に強いものに倒されて、そのローテーションは世界が存在する限り続いていく。一部の人間は既にそれを認めている。弱いものにとつては、ただ傍観するしかない世界。

そんな弱いものに、それに対抗できるチカラを与えて、世の仕組みをこつた返そうとしているものがいる。誰。そんなことは気にしなくてもいい。そのような存在がいることだけを信じて、今を生きていけばいい。

その異次元空間から脱出したとき、私は成長していた。

荒廃した病院。ベッドとその周囲のカーテンが無造作に置かれているだけで、とりわけ目立つものがあるわけではない。窓の外に桜がそわそわと揺れている。

知っているはずが無い。ここは未来。私の体がそれを物語つている。でも知っている。このチカラはどこまでも知識を追いつづける。この世にある全ての情報を知り尽くしたとき、このチカラは新たな情報を自ら作り出す。

「もしもし。」

近くの公衆電話。携帯電話の普及によつて、徐々に少なくなつてゐるものである。

近所の人から、両親に見捨てられた女子高生の役を演じ、テレフォンカードと近くにある高校の電話番号を借りると、その公衆電話からその高校へと電話をかけたのだった。

「はい、しづら県立西高校でございます。」

よくとある、初老と思われる男の声が響いてきた。

「転校生の紹介です」

クラスの中がざわつき始めた。無理も無い。今日は始業式から一日経ったばかりだからだ。先生も少しばかり口端に疑問を映しているが、恐らくは手違いがあつたと聞かされているのだろう。少しばかり雑だが、型にはまつた転校生紹介を始めた。

「星山新ほしやましんです。」

少し前に出て、そう言って礼をする。溶け込めるかどうかは分からぬが、皆出合つてそう経つていないと思われる。それなら、クラスとのハンデは同じくらいな訳だから、問題は無いだろう。

「そんじゃ、あそこの一一番後ろの席に

「はい。」

先生にそう指示されて、私は窓際の一一番後ろの席についた。朝方は日が差し込むらしく、机が温まっていた。

「それでは、今日の予定ですが……」

私は、普通の人間らしい生活を送ると信じていた。

昼休み。窓際の席でぬぐぬぐと口差しに当たつていると、前の席の子がある種残酷な旨の言葉を言って来た。

「お弁当……？」

「うん。あれ、もしかして忘れちゃつた?」

前の席の染瀬真利やなせまいという女の子が、なんとなく無愛想に見える私に結構友好的に話し掛けてくれたので、溶け込めるかどうかは大丈夫だと思い安堵した。

それでもこのチカラが知らない情報は無論、無数に存在するのは確かだ。

「忘れた……」

かといって、購買部で何かを買うためのお金も持ち合わせていない。というか、それ以前にお金を一銭も持っていないから仕方ないこ

とだけど。

「そつか。まあ仕方ないよね。私のいる？分けてあげようか？」  
ショートカットにした髪を揺らして、私に弁当を差し出してくれる。  
この好意は、乾いた井戸に降り注ぐ雨のように嬉しかったが、それ  
でも馴れ馴れしくそれを受け取つてしまつるのは憚られた。

「え、いいよ。そんな。」

「ん……そう。でも食べないと午後お腹すいちゃうよ？」

「大丈夫。我慢するのは慣れてるから。」

「そつか……そうだ、購買部でたまに余つたもの配つてたりするか  
らそれを当てにしてみればどう？あんまり期待はできないけど。」

「ありがとう。」

私はそつ言つて席を立つた。

北側の校舎の一階に点在する購買部。真利にいわれたとおりに來  
てみたが、期待しないほうがいいという言葉どおり、見事に完売し  
ていた。

とはいへ、なれているという言葉は嘘ではないし、午後は昨日や  
つたというテストを返すだけと聞いたので、ひもじいのは大丈夫だ  
ろう。家に帰つたところで食べられるかどうか怪しいが。

昼休みは、まだ大分時間がある。それだけ購買部が人気なのがよ  
く分かつた。

教室に帰つて昼休み終了まで他の人が弁当を食べているのを見てい  
るのは、意識が我慢できても、体と理性は黙つてはいないかもし  
れない。

屋上開放がされているとのことだったので、私は暇潰しと、下見  
と、風に当たりに行くのを兼ねて、屋上に赴いてみることにした。  
屋上の扉を開いて、出てみたが、そこに広がつていた光景に目を  
瞠るしかなかつた。椅子が用意されていふようだが、それ全てに群  
がるように生徒が座つてゐる。それも大体がグループである。のこ  
のこと入つていけるはずもない。それにほとんどが先輩のようだ。

建物の面積と同じだけの面積がある屋上は結構な広さがあり、端から端を歩いて往復するだけで結構時間がかかりそうだ。

しかし、私は何故異次元に迷い込んだのだろうか。ましてや、何故今ここに放り出されたのだろうか。

異次元にあつたもの。人間の悪意、欲望、真意、恐怖。存在意義。知りたくも無いのにることになる恐怖。

何年間いたのだろうか。十、十一年ほどだろうか。

世界は大分変わった。それでも私は、きちんと現実を受け止めて、「今」らしく生きている。

「鍊金術。もしくは、それと酷似した能力。鍊金術なんでものじゃない。これは兵器にもなりえる。誰にも見せるわけにはいかない。上履きの底が何か、柔らかい球体を踏んだような気がした。それと同時に上がる、声にならない声。数瞬後に、それは食べ物だと悟つた。

恐る恐るその声の方向を見ると、『足が脆くなっているので座らないで下さい』と、座る板のしたから垂れ下がつている椅子に座つた男子生徒の姿があつた。まさに果然として、私が踏んで原型が分からなくなつていて（じやがいもかな）を見ている。

「あ、ご、ごめんね……。」

さつと足をその上から退けて、そう言つと、その男子は顔を私の方に向けた。どこかパツとしない顔であるが、別段悪くは無い。

私を凝視しているその目は、どこか意識が灯っていないように見えた。私はつい混乱して、よっぽどショックだつたのか、と思つて次の句を重ねた。

「ほ、ほんとごめん。ちょっとよそ見してて……」

少しばかり上ずつてしまつたと、自覚しながら相手の機嫌を伺うと、ハツとなつたように瞳に色が戻つた。それから、どこか慌てたように言つた。

「べ、別にもう落ちたもんだから構わない。」

それを聞いて少し安心したものの、すぐに彼が無様に潰れてしま

つたじやがいもを見て、頭を垂れてしまつたのを見て、罪悪感が援軍を連れて戻つてきてしまった。

「……あ、これ使う……？」

そのままスルーしていつてしまつるのは人間としておかしいと思つたので、朝、登校途中に貰つたポケットティッシュを差し出してみた。

彼は顔をあげてそれを見た。すると、そのままスイッチが切れたようにそれを凝視し始めた。

「だ、大丈夫？」

どこか不可解な彼の行動に、自分が大変な間違いを犯してしまつたんじやないかと不安になつて尋ねた。また瞳の色が失われている。「ああっ！サンクスっ！」

しかし、そのあとハツと目に意識を取り戻して、私の差し出したティッシュを受け取つた。それからビールの隙間からティッシュを一枚抜き取つて、潰れたじやがいもだつたものを拭き取つた。床には跡が残つてしまつたが、時間が解決してくれるはずだ。

「あ、これありがと。」

そんな光景を、なんとなく見ていたら、彼がまたティッシュを差し出してきた。手が不器用なのを隠そうとしてか、指が不自然な位置にあるのを見ると少し面白かった。

「うん。ありがと。」

私も何故か礼を言つて、彼の傍から踵を返して、自分の歩いてきた道に指針をとる。

「あー悪い悪い。遅れた。」

立ち去り際に、彼の友人らしき人物がきたらしく、生物兵器並に悪い呂律でそんなことを言つていた。  
風はほとんど吹いていなかつた様に感じた。

夜の学校は、しんみりとしていて氣味が悪い。よく怪談話などの舞台になるのも無理は無いと思つ。むしろ、そういう怪談話の舞台

にさせたから、そういういたイメージを持たせてしまったのかもしれない。人というのは、先入観でものごとを決める傾向が強い。

何故こんなところにいるかというと、件の異次元のことが大きく関係している。

異世界の『何者か』が齎した情報によれば、魔物おぼしき存在してはいけない存在が、この世に誕生してしまったらしい。

私は救世主になるらしい。

ふざけるのもそろそろおしまいにして欲しい。何が救世主。そんなもの存在するわけが無い。未来を予測できる者なんて。とにかく、そういう事情があつて、こうして夜の学校に赴いているのだ。

恐らく私は召還された。この閉鎖された土地に。

このあたりに四散する中学校の優秀な人間ばかりがこの学校に集まつてくるように仕組まれている。そんな感覚がする。逆に優秀ではない人間は、この近くの私立高校に行くことになる。そんなシステムができあがっているのだ。

所以、そんなところに意味も無く投下されたわけもない。となると、このあたりにそういう望まれない存在があることになる。

そうなると、やはりこの学校が怪しい。私の転校をあつさりとは認した態度。気に食わないというか、おかしい。

ザップ！といきなり糖分でべとべとした液体が上から降つてきた。もちろんそれは私の体をびしょびしょに濡らす。

「何？」

そのあと何かがコツンと頭にあたる。踏んだり蹴つたりだ。全く

……。

私の体を濡らした液体が入っていたと思われる空のペットボトルを拾い上げる。どうやら屋上の自販で買つたものらしい。単に炭酸水の中に砂糖を入れただけの粗末な代物だが、意外と人気らしい。

私はため息をつくと、それを鞄に入れようと手をかけた。このまま放り投げて行くのも少し気が引ける。と、思つたら今度は、

人が落つこちてきた。しかも、男らしい。

「きやああああ！」

あちらは背中から、こちらは頭から当たつてしまつたらしい。もろに正面からぶつかりあつた両者は相当な衝撃を双方に残し、それぞれ崩れ落ちる。正に泣きつ面にスズメバチだ。

「いたた……。」

私が常人だつたら死んでいたと思つ。絶無結界張つといて良かつた。

鍊金術と彼らが呼ぶ魔法のよつたものの一つで、特殊な無色の金属で体をコーティングしているような感じだ。しかも衝撃を吸収するだけで、当たつてきたものに特に損害は出ない。

じーんとした感覚の残る頭をさすりながら、私の頭上から振つてきた人に近づいた。途端に、鼻を強くつくよつた腐敗臭に襲われた。これは……！

砂糖水を被つた後に、ペットボトルを喰らつたことなど瞬時にどこかへ捨て、そこで倒れてる人に駆け寄る。左腕は完全に腐敗しきつてゐる。

(…………あの毒…………)

強烈な腐敗臭にこの腐り具合といつたら、あの虫の毒だろう。いきさつはどうだか知らないが、どうやらこの木の上でこの砂糖水を飲んでいたら、黒い虫に刺されたのだろう。

黒い虫。異形の怪物。

虫。なんとありきたりなのだろうか。恐らくのところ<sup>むずか</sup>の蠍のような容姿をしていると、『何者か』は言つていた。といふか、そのような情報を教えた。

私がクッションになつてしまつたせいか、他の外傷は少なかつた。良かつた。

すぐにでもその虫の行方を追いたいところだつたが、この人を見捨てるわけにはいかない。この毒は特殊で、その体の一部を完全に腐らせきつてから他のところへ毒が広がるのだ。

鞄から小さな小瓶を出して、中身を全てその腐つていく左腕、とくに付け根の部分にその中身をかける。少し狙いが逸れて、私の太股に掛かってしまったがきにしない。

解毒剤だ。あの廃病院で見つけた、ハブの毒の血清を私が改造したもの。分子構造を少しいじるだけだったから楽だった。

これで多分毒は消えた。でも、この腕は気の毒だが、切るしかないだろう。ほとんど腐りきる直前だったのだ。

よく観察してみると、暗がりの中だが、その人が着ている服がこの高校の制服だと気づいた。だからよく顔を見てみると……

「あつ……。」

昼休みに煮つ転がしを屋上で転がしていた人だった。恐らくは同学生年。

どうして生徒がこんな時間に、木の上でジュースを飲みながら？  
「はあ……巻き込んじゃつた……。」

素朴な疑問は山積みだったが、目の前にある大事な事実を解決する方が優先順位は高いだろう。

私は両手を特殊な形で組んで、念を唱えた。

「磁界動戒石……。」

それは単なる強力な磁石だ。だが、地球上に存在するN極、S極どちらでもない物質のもの。だから、必然的に反発によって宙に浮いていることになる。

本来ならば、そのまま反発で宇宙空間まで飛んでいつてしまうのだろうが、何故かうまくバランスがとれて、中を浮遊している。これに関してはあんまり私も情報を持つておらず、気がついたら持っていたもの。そうしたものはチカラの意思によつて作られているものだ。私がどう研究したところで、新しい物質は作ることができない。

気絶しているその人をその石に載せた。男子だから重いのは当然なのだが、さらに意識がないと更に重くなっているように感じる。腕は緑色に変色しているものの、既に腐敗は止まっている。もし

も毒が回っていたら、それは厄介なことになる。

その虫の毒は特殊な毒で、ある体の一部分、今回は腕だったが、そこを完全に腐らせきつてから、全身に回るという性質がある。所以、その部分が腐りきる前に解毒してしまえばいいのだ。

だが、腐敗してしまってから、解毒してももう遅い。この異常な腐敗速度が語るように、全身に少しでも毒が回ると、死は確定したと同義だ。

腐りきった腕を切り落とし、銀色の容器に入れる。まだ臭いが、わつきよりはマシだろう。

泥まみれの制服の名札には神樂かぐらと書かれている。恐らくは毒は回っていないと思うが、もしもまわっていて、死んでしまったら家族にどうやって説明すればいいだろうか。

私は首を振つて、意識をしつかりとさせて、彼と向かい合つ。私が壇だんにしている、廃病院の一室。電気はつかなくて夜は不便だが、すめないことも無い。

私は、少し視線を下に下ろして、それから決心する。私の行動力の無さが引き起こしたのだ。それなら私が責任を負う義務がある。彼の右手は、何か楽器でもやっているような手をしていた。恐らくやっているのだろう。それならば、作つてやらねばならまい。

義手を。

素材は、チカラが初めて作つた、ソダロステイックという素材。私が勝手に命名した。

重さは私が自由に決められて、形もそれなりに自由が利くので、もつてこいだらう。

窓の外で、バイクのエンジン音が聞こえた。

## 発端（後書き）

一応、シリアルな感じなんですが、これは部活メインの学園戦闘物です。これは下敷きといったことで、伏線をばら撒いたんですが、大して撒けませんでした……。  
とりあえず、次回からきちんと始まると思います……。

ピアノが置いてある。グランドピアノだ。シンプルな、黒くて装飾品のついていない簡素なピアノ。私が目覚めたときからここに置いてある。存在は知っていたものの、弾いたことなどないから弾き方など分からぬ。

真っ白な鍵盤の一つを叩くと、音がでた。それくらいは知っている。

適当に鍵盤を叩く。弦の悲鳴ともとれる、重厚な音が閉じた蓋の内側から聞こえてくる。

……懐かしい。

一度も触れたことも、ましてや見たこともなかつた。ただ知つていただけの存在だつた。だが、どこか懐かしい響きがする。

本能に殉ずるまゝに、鍵盤に指を走らせると、全く知らない、本当に知らない曲を奏で始めた。曲名など分かるわけがないが、どこか懐かしい。知つているはずがないのに懐かしく感じる。

何故この廃病院は、血清などはまだ分かるかもしけないものの、ピアノなどを個室に置いてあるのだろうか。

その疑問をふと頭に思い浮かべたとき、とある鍵盤を叩いたら妙な音がでた。もう一度叩いてみると、また妙な音が出る。恐らく弦が切れているのだろう。

私はため息をついて、その鍵盤を避けるようにして、もう一度指を躍らせてみた。

どうしてこう、悲しいというか、切ない曲しか弾けないのだろうか。どうして私はそういう曲しか覚えていないのだろうか。

だが、答えが出るはずもなく、それを知つて私はただひたすら鍵盤に指を走らせていく。

指が無意識のうちに止まった。

後ろを振り向くと、カーテンの後ろに動いている気配を感じた。

外からの明かりで、ぼうつと影が映し出されている。

私はピアノの傍から離れて、ゆっくりとカーテンを開いた。

神楽君が、びっくりという言葉を顔に浮かべていた。その顔にはあからさまに混乱の色を浮かべていて、その左腕を右手で抑えている。

混乱できるのは、思考が安定している証拠。きちんと説明すれば恐らく分かってくれるはず。……。

「あ、起きた。良かった……。」

そう言って近づくと、彼はぎょっとしたように身をすくめた。左腕がぽんとベッドの上に投げ出される。一応動いてはいるようだ。ソダロステイックは、自由がきくもの、クセがそれなりに強いので、拒絶反応を起こすときは徹底的に起こし、最悪死に至る。かといって、他の素材を選んだとしても、これに勝る適材はないので、一種の賭けとしてこれを選んだ。見事に賭けには勝てたようだ。

私はベッドの左側にまわって、彼の左手を握ってみた。体温は完全に義手に染み込んだようで、金属の様な冷たさではなく、頼りになりそうな体温が感じられる。

「これ……使える？」

金属質の色を湛える指を、確かめるように動かしながら、私は訊ねた。拒絶反応が出るか出ないかの問題とは更に別、きちんと動くかどうか。それは確かに、理想ではあったが、私は少しのリハビリの必要性を覚悟していた。

「あ、ああ。一応。動くことは動く。」

そういうと、彼は自らの意思で指を動かした。

「良かった……初めて作ってみたんだけど、きちんと動くかどうか心配で。」

そう言って胸をなでおろす。

ロボットの設計図などを基にして、先ず普通に形を作った。それから、モーターを作り、動力源の確保をする。エネルギーは、体から血液を媒体として送るのが普通だが、ここに特殊な液体を介させ

ることによって、熱エネルギーを電気エネルギーに変換させる仕組みをつくり、それを電気コードでそのモーターへと繋げた。これで停止することもない。慣れるまで、モーターが誤作動することも度々あると思われるが、これは時間が解消してくれるはずだ。特殊な液体とは、チカラの情報によれば他の素材と違つて限りのあるものらしい。私もそれを信じて極力使用を避けてきた。

「はあ……それは……。つてええ！？作つた！？」

その素つ頬狂な声を聞いて、思わず口を滑らせてしまつたと悟つたが、もう後の祭り。彼は目を限界まで見開いて私を見ていた。その瞳には、尊敬といつた私が負つには重すぎる言葉が浮かんでいる。「て、ことは……これ義手？」

改めて確認する彼に私は何とか嬉しそうな顔を裝つて、言う事ができた。

「うん。ホント動いて良かつた。」

どこか自分の惨めさに、哀れみを感じて涙が溢れてくる。バレてなければいいけど。

「つてことは……俺の左腕は？」

「あっ、えとつ」

そう訊かれて、私は少し取り乱してしまつた。

見せてショックでも受けてしまつたらどうなるだろうか。彼は虫に刺されたときに自分の腕が腐つていいくところを見ただろうか。視線を泳がせて、黙り込んでしまつた私を見て、不審に思ったのか、彼が言って来た。

「もしかして……融けた？」

その通り。融けた。否定はできない。

「と、融けたわけじゃないけど……。」

それでも語尾を濁しながら否定してしまつ。申し訳ないといつ念に頭が支配される。

彼の目を見たらもう戻れなくなつてしまつた。真実を知りたいとまつすぐに思う、真摯な眼差し。怖いくらいに私を見据えていた。

仕方なく、おずおずとベッドの下に手を伸ばし、少し重い容器を持った。軽くまだ腐敗臭が残っているがいざれ消えてしまつだらう。

「融けてるじゃねえか……。」

そこに入つていたのは緑色の液体。筋肉はあるが、骨まで緑にそまつて融けてしまった。

「うん。まあ、そう言つてしまえばそうだけど!……。」

彼の突つ込みをもろに受けた、私は立つ瀬が無くなつてしまつて視線を逸らす。

彼は少し嗚咽を漏らして、視線を逸らしたので、私はその容器を給湯室だった場所に持つていった。完全に暗くなつてゐるもの、私は夜でも目が利くほうなので困らなかつた。

流しにまとめてその中身を流す。このまま放置しておけば、空氣に含まれている窒素<sup>チッソ</sup>となんらかの反応を起こして、ただの色水になるのではないかと思つたが、とくに残しておく理由もない。

そうして腕だったものを片付けると、彼は訝しげに義手を覗き込んでいた。どうしたのかと思い、近づくと顔を私に向けていった。

「なあ……これはおかしいだろ?。」

「動作不良か何かある?」

不安が光のごとく意識を横切る。

しかし、彼は手刀を作つて思いつきり左右にぶんぶんと振つた。

「いや、そうじゃなくてだ。こんなによく作れたなつて。俺の左腕をそのまま金属のカタマリにしたような……そんな感じだ。全く違和感がない。うん。」

まだ不安は残るけど、なんとなくその言葉に含まれている私への心遣いが嬉しかつた。

「それならいいんだけど……でも神楽君なら大丈夫かと思つたよ。普通の人なら拒絶反応とか起こしたりしたかもしねないけど。」

「ん、何で俺の名前知つてんだ?」

どこか興味深げに訊いてきたので、私は言葉に詰まつてしまつた。

「名札……。」

無礼を説ぎるよつにおずおずとそう言つと、彼は自分の胸を見下ろし、納得がいったように顔を綻ばせた。

「そつか……これは盲点だつたな。」

なんとなくおかしかつたので笑いそうになり、それを抑えるようにしたら微笑したような表情になつてしまつた。それを隠すように私は立ち上がって、彼の寝ているベッドを取り巻いているカーテンを束ねた。外からの日の口差しがはいりこみ、彼は眩しそうに目を細めた。

「今日で二日目。もしかしたら毒が回つてもしやと思つたんだけど……。」

彼の気を紛らわす意図をこめて、そう言つた。そうすると、目が慣れたのか彼は手を下ろした。

「毒？」

「うん。毒。変な虫に刺されたんでしょう？」

「ああ……」

彼は納得したように声を漏らした。それまでは単なる推測でしかなかつた要素がこれで確信へと変わつた。

「そうだ。そう。変な虫に刺されたんだ。」

「……。」

なんでもないよつに、自分の腕を奪つた要素を軽々と言つてのける彼を見て、私は自分に恥じらいを感じた。チカラの存在を鬱陶しく思わなかつことなどない。私はこれに壊されたようなもの。

彼は、常人の常識外の成り行きで義手になつたというのに、全くその目に不安を佩びていなければいい。私とはまるで正反対。

「ピアノ……弾けるのか？」

私は窓の外に逸らしていた視線を彼に戻した。その目はそこに大きく置いてあるグランドピアノに向かれている。よく見ると、金属部分が錆びているのが目に入った。

「うん……少しなら。」

あくまで、これはチカラの情報下におかれた腕前でしかない。こ

れは私が弾いたわけではない。奏者の気持ちの籠つていらない音楽に上手下手など存在しない。それでも聽かれてしまった以上否定するわけにはいかなかつた。

私がそう言うと、彼はため息をついた。脱力ではなく、感嘆のため息だつた。私を見て、自分の気持ちの溝が深まつていくのを感じる。

すると彼の顔が、ミステリードラマの主人公が謎を解いた時の様な顔に輝きを増していつた。私は、人間の直感というもので、厄介なことに巻き込まれるんじゃないかと思つたが……

「……どうしたの？」

彼の視線は私の服に向けられているようだ。見ていくといつよりは、凝視に近い。そして必死に何かの思考をめぐらせているようだつた。

突然舌を噛んだように顔をしかめてから、私を正面から見据えた。

「俺と同じ学校だよな？」

それから私は、自分の着ている服が制服だったことに気がついた。初期状態で着ていた服があつたが、朝ゴミ収集者に持つてかれてしまつた。

だが、私はそんなことお構いなしに、彼の真摯な眼差しに圧倒されていて。そんな風に圧されて私はゆっくりと頷く。

「部活入ってる!?」

首を横の振る。

「それなら！」

その答えを聞いて勢いに乗つたのか彼は、一気に畳み掛けた。

「一緒にバンド部を作らない!?」

どうしようもなく突飛なその質問というか誘いに、私は目を点にして彼を見ることしかできなかつた。バンド部というのは、軽音楽部のことだろう。うちの学校にはなかつたはずだ。だから作らないか、という発言。

私に趣味なんか存在しないから、部活のことに関しては無頓着だ

つた。何か問題が発生したときにその問題をこの土地から駆逐する。それが私の役目だつたはず。だから、そんなものに入る必要はないと考え、部活に入るつもりはなかつた。

でも、その理由がここに発生したような気がする。

神楽 仁 隻腕の高校生。私の運命を大きく傾かせる存在。運命？ そんなものは存在しない。あるのは宿命のみ。呪いと同義の、縛られたら最後成し遂げなければその呪縛から逃れられない、天命。だとしたら。

私が彼を巻き込んだことになる。直接でないにしても。間接的に。彼の持つている義手は特殊だ。人類の技術では作り出せない物質で作られている。所以、見つかるとそれなりに厄介なことになるだろ。

彼とクラスは違う。それはチカラを以つてしても動かせない。それでも、最大限彼の傍に付いている必要がある。あの液体を注いでしまつた以上は。

「つ、作る？」

無意識にそんな言葉が飛び出していた。私自身も驚いたが、彼もそれ以上に驚いていた。

「そ、そうだ。作るんだ。俺がベースできるんだ！ なあ一緒にやろう！」

ベース。バンドの中でも下の方を支える大切な役割だ。

「…………う、うん…………。私もやってみたかったから…………やろっか。」

そんな風に言つてしまつたが、私にそんな意欲はない。それは申し訳ない念で一杯だ。私の本心を知つたら彼はどんな顔をするだろうか。

でも……彼が私を必要としているなら……。

彼を見ると、心の底から雄叫びを上げたいが、我慢したような面持で喜んでいる。

「でも……あと一人は？」

私は生徒手帳に書かれた部活発足のための要項を思い出していった。

三人以上の部員。一人以上の顧問の先生。文化の向上のための目的。

「これなら少なくとももう一人必要になる筈だ。

そうすると、彼は左手の親指を私に向けて立てて、さつきよりも張りのある声で言った。

「安心しろ。このテンションになつてしまつた俺を止められる奴はない。」

「は、はあ……。」

そんな彼を見て、私はただ見ることしかできなかつた。

「心あたりがあるんだ。自己紹介んときに言つてた。ギターが趣味だつてな。」

なるほど。そういうテンションのことかと私は納得した。

「何でそれからすぐ誘わなかつたの？」

「ん。そいつと一人組んだどこでなんも変わらないだらう。ましてや、ほとんど会話もしたことないし……。でも、そいつがバンド好きだったら、いけるかもしけんな……。」

そんな彼を見て、思わず吹き出してしまつた。まるで何かに夢中になつている子供の様に見えてしまつたからだ。

「あ、ごめんなさい。別に、馬鹿にしたわけじゃ……。」

驚いたように目を見開いて私を見てきた彼に、私は慌ててそう言い繕つた。

「なんていうか。こんな熱血な人初めて見たから。」

「……俺、熱血か？」

熱血というよりも、もつと適切な単語があるような気がするけど、私はそこまで思考がまわらなかつた。

彼は今までの会話を反芻するように考え込んでいる。

「どうしてバンド好きなの？」

そう訊くと、彼はふいと顔を上げた。

「憧れてたんだ。子供のころ、ベース教わつてからかな……。よく

ここまでやれたと思つてる。」

子供の頃、か。羨ましい。私は一体どんな子供時代を持つはずだったんだろうか。それは疑問といつより、理不尽な宿命に対する憎しみでもあった。

「……えと。なんていうんだっけ。」

「星山新。」

「……ああ……転校生の……。」

「うん。」

そういうえばそういうことになつてたつけ。

「他のところ行つてたんだけど、入学した直後にお父さんの転勤が決まって。」「へえ……。」

私は咄嗟に思いついた言い訳を言つてみたものの、「お父さん」らしき人物はおろか、私が住んでいるとも思えないこの部屋がその矛盾点を誇張させていた。

彼も気づいているんだろうけど、気づいていない振りをしてくれていた。

「んで、なんで星山はバンドやつたいんだよ。」「何でつて……困つてるんでしょ？」

思わずいつてしまつていた。

彼は入りたい部活があるのに、学校ではなく、作るための部員も伝もない。困つていた。私が彼の要求を受諾したのは、互いの利害が一致するから。

「困つてる?俺が?」「うん……。いや、なんでもない。忘れて。うん。私も憧れてたから。」

首を大袈裟に振つて、否定する。そんなこと言える筈がない。こんな純粋な人に……。

「……でもさ、最初から全員できる人入れなくともいいんじゃないの?」

そこでふと思いついた疑問を出した。普通にうこうのは、

希望者を募つて、皆で一もとい零から作り上げていくものでは。上手い下手関わらずに。

「いや、こには全員できるのをいれて、実力を見せ付けて、希望者を募るのがいいんだ。どうせ音楽経験のある顧問は吹部に持つてかれてるだろうし、それぞれの楽器の専属が居た方がいいんだ。」

「へえ……。」

どちらへんがいいのか分からなかつたが、彼はどうせ今募らせたところで、入つてこないことを分かつているような言い方だつた。そんなはずはないと私は思う。

それでも、楽器の専属が必要という部分は頷ける。

「さて。俺は今どこにいるんだ？」

話が一段落ついたところで、最初に訊くべきことを彼は訊ねてきた。それだけ、バンドをしたいという気持ちがまっすぐなのだろう。

「私の家。」

「……お前の家広いな……。」

「ううん。私の家はこの部屋。」

きつとこの廃病院全体を見てから、この部屋の規模で捉えた見解であるとともに、冗談を少しばかり混じらせた意味でいつたのだろう。

「んで、何で俺はお前の家に居るんだ。」

「だつて腕が融けてたから、ほつとけないでしょ？ あ、いいそびれるところだつた。」

そう言ってから、私はようやく義手のことを思い出した。

ソダロステイックの存在が人類に知れたら、恐らく国と国との格差が更に大きくなつてしまふだろう。形重量を自由に変えられて、鋼よりも丈夫ときたならば、これに飛びつかないものはいない。そういう大きな噂は、小さな穴から漏れていきいつかは海を構成してしまうのだ。

「なんだ。」

「あの、その義手は絶対に人に見せないで。」

「……無理だな。」

彼は左手をがしゃがしゃ動かしながらうめいた。

「つづん。無理じゃなくてやらなくちゃいけないの。貴方だつて、左腕なくなるのは嫌でしょ？」「うー…

そういうと、彼の顔つきが変わった。きっとそれもバンドの影響力が大きいのだろう。

「……でもどうすんだよ。」

「これをはめて、長袖を着れば、よっぽどのことがない限り大丈夫だと思う。」

私は予め用意しておいた、黒い手袋を差し出した。

これはソダロステイックにゴムを化合させた物質で作った手袋で、伸び縮みが自由に利いて、なおかつ丈夫に作られている。黒くなるのは仕様で、これ以外の色に染める方法はまだ見つけていない。この黒さは、透明度零%で透ける心配がないため、義手を隠すにはもつてこいだろ？

「長袖？ これから夏だぞ。暑いし……。」

「感覚神経は繋がってないから、暑さは感じないとと思う。もし感じたとしても、我慢して。」

彼が訝しげにその黒い手袋を義手にはめると、予想通り綺麗にその黒い生地の下に義手は隠れてしまった。

「あんまり薄い長袖はやめて。透けるかい。」

「ああ……もちろんだ。」

「あともう一つ。」

「何だ？」

「家族にも見られちゃまずいの。ビニール居るか分からぬから。」

「何が？」

また口を滑らせてしまった。無論、噂の漏洩口である。<sup>スリップ</sup>

私は首を振つて誤魔化すと、二の句を続いだ。

「とにかく、誰にも見られちゃまずいの。それから私も監視しなくちやいけないの。」

私がそういうと、彼は気圧されたように、首を縦に振った。

「だから、私の部屋に引っ越してきて。」

彼の顔が硬直した。遠慮と戸惑いが交錯して、新たな分野に踏み出そうとしているよう。

私だつて羞恥心くらい弁えている。所以、年頃の男女が一つの部屋で暮らすなんて、とんでもない。それでも事情という壁は常識を大きく越脱し、重厚長大に立ちはだかる。

「……分かったから、その日はやめてくれ。」

私は気がつくと、彼のことを凝視していたらしく、私は慌てて視線を逸らした。

「で、でもすぐには無理だ。家族に説明しなくちゃいけないし、賛成ももらえるか分からな……。」

当然だ。

「私も説得しにいくから。」

「や、や！ 一人暮らしつて設定にすんだよ。どう考へても駄目だろうが！ 年頃の男女が同棲だなんて！」

確かにそうか。

「私は構わないけど。」

「お前は良くても世間が構わなくないんだよ。」

……冗談だとは気づいてくれなかつたみたいだ。

ふと、彼の顔に翳かげが落ちた。

「三日つて言つたつけ。」

「うん。」

「そうか。私は自分の迂闊さを悔やんだ。」

彼は私と違つて、家族がいる。三日間家を空けておいて、心配しない家族などいないだろ。さらに、三日後に帰ってきておいて、一人暮らしを始めると言い出して、賛成を示す親などいるはずがない。

「……。」

彼は困ったように考え込んでいる。どこか思考をめぐらせている、

その中央にあるものが私の考えているものとは違つよつた気がするけど、私は掛ける言葉が見当たらなかつた。

「あの……もう帰つても大丈夫だから……。」

「ああ悪い。」

結局、困らせておいて、帰らせるような発言をしてしまつ。彼は、とりあえずといった感じで納得してから。

「俺帰つていいのか？」

「え？ うん。だつて義手が動けばなんとかなるから。」

彼は混乱したように、そろいえばあのとき木から落ちてたよな？と黙つて来た。

「そのあたりは、ちょっと……。」

本来なら大怪我でこうしてピンピンとしているなんて、絶対的にありえないんだけど、私が下にいたことが幸いした。私があの場にいたことはある種の幸運だつたわけか……。

「ならない。んじゃ。」

彼はそう言って、扉から出て行つた。

「あ！ ちょっと待つて！ 道分かるの！」

私は慌てて叫んでみたものの、彼は階段に吸い込まれるようにして消えていた。

## 義手（後書き）

ん、無理に沿わせたものだから、結構酷くなりました。とりあえず、長続きするか様子を見てみます。；

数十分後、なんと神楽君は大きなスープケースを抱えて戻ってきた。なんというか、あつさり追い出されてしまつたらしく、顔が悲痛に歪んでいた。

「え、早いね……」

かける言葉も見当たらず、とりあえず素直な感想を述べてみる。少なくとも結論は明日出すであろうと思つていたのだが……。

「ん、半ば追い出されたって感じだな。」

もつと海溝よりも深い家庭事情がありそうだつたが、そうしてできた傷に塩を塗りこむよつなこと、私にはできなかつた。よくみると、頭に瘤しわらしき突起が出来ている。

「どうしたの……それ。」

「ん、これか？殴られた。」

やつぱり無茶なこと言つてしまつたか、と私は申し訳なくなる。いくら事情が事情とはいえ、私が勝手につけた都合だし、私の自分勝手だ。彼には自分で選ぶ権利があつたけど、腕がなくなる、と半ば脅しといった感じで了承させてしまつた軽率さを私は悔やんだ。「い、いや、これはだな、妹に殴られたものであつてだな、決して口喧嘩になつた成り行きで追い出されたというわけでは、断じていな

い。」

彼を見ると、狼狽した表情で私を必死で慰めよつとしてくれている。

「うん……ありがと……」

「いや、マジだからな。言つとくけど。あと、俺は半ば、てか全面的に後押しされるような形で家を追い出されてきたから、別に電話とか掛ける必要も無いからな。」

半眼で私を見据えて、私がとろうとしていた行動に釘を刺されてしまつて、私はぐうの音もでなかつた。

「えと、その荷物はあそこに置いて……」

「ちょ、ちょっと待つてくれ」

私が家具のスペースの各自の取り方を説明しようとしたところ、

彼から上ずつた声で制止が掛かる。

「なあに？」

「あのさ、ここは病院だったわけで、この病室は個人部屋だよな？  
それなら、ベッドが一つしかないんだよな……？」

私は彼の言いたいことが分かった。

「あ、二人で寝るのがきついのなら、私が下で寝るから……」

「ち、ちがつ、最後まで聞いてくれって。つか、一人で寝るつもりだつたのかお前は！」

死の宣告を受けた罪人みたいに、彼が狼狽の色を深めて顔を赤くしてそう言って来たのを聞いて私は首をかしげて言った。

「え、だつてそういうでしょ？」

「……まあそれはいいとして……そういうのは駄目だと思つんだよ。どちらかが一人、この冷たい床で夜を越すなんてな。」

それは良心的な問題だろうか。

「え、私は別に構わないんだけど……」

私が言うと、彼は顔を歪ませた。

「お前なあ……。そういうのは駄目だらうが……」

「え、なんで？」

「いや、なんでもない。だからだ、俺一人で寝れるわけがないだろうが、星山が一人で床にねてんのに、俺が一人ベッドを占領してぬくぬく寝てるなんて。」

「え……それならやつぱり一人で」

「だだからそういう問題じやねえっての！他に部屋は取れないのかつて話だよ！」

私が驚いたように目を開くと、彼は何故かハツとしたように口を紡いだ。

「そそうこう意味じや……別に好意を無駄にしようとしているわけ

じゃない。つてか、年頃の男女が一つの部屋というのは、事情がどうであれ、駄目だと思う。俺たちは良くても、世間が許さないだろうな。だ、だからだ。俺はお前の家、ここだけ、この隣に住むだけでいいじゃないか。うん。 そつだろ?「

私は一考する。

彼に引っ越してもらったのは、家族から離れてもう、人から隔離するため。酷い言い草だけど、これが目的なのは確か。彼には申し訳ないけど、運が悪かった、と諦めてもらうしかない。

しかし一人ならば、私とそう近くなくてもいいかも知れない。まして、隣ならば、おなじくらいう目ににつかないし、何かあつてもすぐ駆けつけられる……はず。

それとあまり関係ないが、『俺たちは良くても』といつといふこと、どこか安堵感を覚えてしまった。

「……分かつた。」

「ああ、分かつた。ありがとな……」

そう言って、彼は部屋から出ていきかけて、「どの部屋がつかえる?」

と訊いてきた。

「ええと、すぐこの階段の向かいのところが一番近いかも。」

「ああ分かつた……。」

彼は頷くと、部屋から出て行つた。

しばらく、呆然として私は見ていたが、もしかしたら彼との同居を断られたことに落胆していると気づいて、苦笑いをせざるを得なかつた。

と、思つたが彼はスーツケースをもつて慄然とした表情で部屋に戻ってきた。

「どうしたの……?」

「いや……」

彼が抱えているスーツケースには私服の上下が一点ずつ、大きなその部屋を占領するように置かれていた。

それを見て、私は背筋が凍りそうになるほど体が強張った。

「おおおおおい！大丈夫か！」

彼が必死の形相になって、私に呼びかけている。

なんというか、彼にはとんでもないことをしてしまつたらしい。家出を強行させて、親と殴りあつた拳句、この結果。私は、常識から考えられなかつた……やつぱり……

「ひつ」

「うん、これは事情が深すぎるんだよ。普通の人からみりやあこうなるのは当たり前だ。うん。星山、ちょいと聞いてくれ。」

彼は私の肩をがくんと揺らすと、そう言つて家に帰つてから、ここに至るまでの顛末<sup>てんまつ</sup>を話しあじめた。

### 回想中

「ただいま。」

「お帰りなさいー。遅かつたじゃないの。」

心配の余地なし。てかここまでくると、俺の人権つて存在するのかも疑問に覚えてくるんだが……。遅かつたですむ時間じゃないだろ？

「学校もサボつたみたいだし、心配したのよー。」

そういうや学校もサボることになつたんだっけか。平日挟んでたからな……。

ぼんやりとそんな事を考えて居間に入ると、何かただならぬ空気の匂いがした。トラの気配に勘付いたシカの様に、足を止めて周囲を見渡す。

なんか……どうしたんだろ？……この空氣。この後に訪れる未来は、必ずといつても良好とは思えなかつた記憶が……。

「バカーー！どこ行つてたのよー！」

ああ、やつぱりですか。こちらの存在を軽視していました。我々のミスです。

妹が、「ミニ箱（空）を抱き上げて振りかぶつていた。それ命じゃ

なくて「ゴミを捨てるものなんですが……。

ライオンに睨まれたサイの様に動けない俺に、ゴミ箱の脳天直撃が綺麗に前頭部に炸裂して、星が宙にキラキラと舞つた。そのまま勢いで、廊下に倒れこむ。

「いいでえ！－！」

「心配したのに……」

その勢いで妹は、俺に馬乗りになつて、ゴミ箱（空）（鈍器属性）を振り上げる。ちょ！待て！この展開は！

「これくらいで許してあげる……。」

そう言つて、軌道修正のきかない道に追い込まれた俺に言い残して俺から降りる。なんちゅう制裁方法だ。これでこれなら、一人暮らしをするといつたら何百発殴られることがやら。あ、でももしかしたら墓での一人暮らしなら認めてもらえるかも。

「ほらあ三日分のご飯よお。」

そんな母の軽快な声が聞こえてきて、なにかの匂いがしてくる。

「……今の心境でこんなもん食えないんだが……。」

テーブルに置かれたのは、本当に三日分のメシ。ただ、質量はそ

うだらうが、これはあつ意味では究極だ。

三日分のメシをごちゃまぜにして一つの皿に盛るのはやめてください。これはちょっと精神的な危ない病気なんじゃないのか？夫が居ないことによるノイローゼからか？

「そんなことより……。」

俺は、その大皿に盛られたハリネズミの死体にカレーをかけたようなものを、テーブルの端っこに寄せた。そして、俺は簡単そうで、意外と難しいボウリングの様な例のこと話を題の棚に上げる。

俺は精一杯の真摯な顔で、言つた。

「俺、一人暮らしをする。」

「！」

母の顔が引きつった。背後から妹のローキックが飛んでくんじやねえかとビクビクしたが、飛んでくる気配が無い。気絶してるのか

?確かめたくとも、後ろを向いた瞬間足の裏が目の前にありそだから振り向けない。

もちろん拒絶を俺は覚悟していたというか、期待していた。当たり前だ。いつもこんな感じで俺を放置プレイしているのだ。というか、本当に無頓着で妹にも口出ししない。メシと居場所を提供しているだけなのだ。そんなのが親でよく妹のようなしつかりものが出来たな、とかよく俺格になかったなとか思つてゐるのだが。いつかこういうことを言つて確かめたかった。俺が本当にこの人の息子か。

「あ……あ……」

おおお、このショックを受けたような顔。これを持つてたんだよ。

狩人が三日ぶりに獲物を見つけたような感じ。

だが……数瞬後その獲物は必ず手に入るわけではないと俺は悟つた。

「やつと決意してくれたのね！」

「はあ！？」

狂喜する母。体があらん限り、全てを用いて喜びを表現して、倉庫として使われてゐる父の部屋にダッシュしていった。そして、スースケースをがらがら転がしていく。ちなみに妹は気絶していました。絶望したのかね。

「いつか言い出すと思つて楽しみにしてたのよーまさかこんな早く役に立つなんて！」

ミューージカルの姑みたいなノリでそう言つて、スースケースを押し付けてくる。ってか軽つ！なんぞ？どうして？普通重いのが恒例だろうが！

「じゃあね。お母さんは貴方のことを一生忘れない」

「待てっ！待てっ！自分の世界に入るなーなんでそんな現実の受け入れが早いんだよーもつと渋れ！」

母はまだ夢のミューージカル公演中！つて顔をして、答える。

「何言つてるのー昨日までは、猫を見ただけでビビッて漏らしちやつたこが、今日になつて一人暮らしするつて言つて出すのよーそれを

否定するだけの権利を私は持つてゐるとは思えない！」

「ヤバイ。これ……早く精神科に連れてつてくれ。昨日俺この家に居なかつたはずだぞ。どれだけあんた疲れてるんですか！？」

「てか、普通は常識的に考えてだ。まず住居のあてはあるのか訊くだろう。次に仕送りの価格を考えるだろう。間隔も。次に家事とかそういうの訊いて、それからその家が本当に自分にあつてるのかどうかを確かめて、近所付き合いを云々をして……。

とにかく、こんな、俺一人暮らしする！はい、いつてらつしゃい！的なのは認められん。てか、星山もこんな早くは望んでないだろうし、そんな映画的なことを考えるのはこの母親しかいない！てか、理由を訊け！

藁で作つてある思考堤防があつといつ間に決壊し、決して少なくない情報が俺の脳内を支配する。要するに、動搖しているのだ。

俺はこの人の息子ではない！

「……。」

そんなスースイケース（猫より軽い）を持つて、母の狂乱振りを呆然と佇んで見ていた俺のよれよれの制服の裾が引っ張られた。

「…………なんだ？」

妹が、目に涙を浮かべていた。背が俺より大分低いので、上目遣いになつておりその微妙な角度がそれに上乗せされて、効果抜群！的に俺の中枢神経を麻痺させた。

「あ、あたしも……引き止めないよ。きっと何か訳があるんでしょ？あたしの部屋にも入つてこれないほど弱虫のお兄ちゃんがそんな事言い出すんだもん。」

いや、それと弱虫は沖縄と北海道ほどかけ離れているぞ。用もなく妹の部屋に入るか普通。

それでも、そんな言葉が妹の口からでるなんて、これっぽっちも予想できなかつたので、俺はそのまま富士山の登山道で図書館を見つけたような顔で、身じろぎすらできずに寛立つていた。

「うん。だから……安心していつてきていいよ。これだけは許して

あげる。」

俺は大変な勘違いをしていたことに気が付いてしまった。それは、この十五年しか生きていらない弱い俺をずっと欺いてきた、とても重くて残酷な嘘。

「いつらは俺の家族なんかじゃねえつ！」

終了

「……とこりわけで、追い出されてしまったんだ。」

「……そう。」

ところどころ重大な欠陥が見られそうな家族だった。なんというか、奇抜というか奇怪というか。変わり者といつてしまえばそうかもしれない。

だが、私にとつては羨ましすぎる話だつた。

「いい家族ね。」

紅茶を彼に注ぎながら、私は思わず呟いていた。そう言つと、彼は思いつきり顔をしかめて見せた。

「どこが。」

私から見てすれば、家族という社会集団の中でも一番身近にある存在があるだけでも羨ましい。誰から、何の説明も受けずにここに飛ばされここに住んでいる私にとつては、どんな不遇な家庭だろうと、羨ましい以外の感情は覚えられなかつた。

「すこし傾いてるけど、『飯を用意しておいてくれたところとか、妹さんの愛の鉄拳が飛んできたところとか、神楽君が決めたことを否定しなかつたところ、かな。』

私がそう言つと、彼は何かに気づいたように深くため息をついた。「どうせすぐ終わってしまう人生なら、少しは楽観的に考えないと生きる意味がないもの。これも一種の自立ね。」

自分で言つてみたから、私に樂観的な思考ができるのかどうか、疑問を抱いてしまつた。結局のところ、彼の義手を作り、無理矢理近くに住まわせてしまつたのも、私の我が侶、自己保身のため。

「……。」

自分の言つた言葉に虜げられて、私は陰鬱いんうつな気分になる。  
これから私は、どう生きていいのだろうか……。

「……悪かった。」

彼が、突然そんな事を言つたので私は少し驚いて彼の方を向いた。  
「両親……居ないのか。」「……。

「なんというか……人間てのは、そんなもんだよな。ある物事に適応すると、別の物事を欲するつていうのか？日本じゃ皆勉強やだとか言つてるけど、世界にはしたくでもできない子供がたくさんいるとかいうのが良い例か。」

彼は照れるように視線を逸らした。私も釣られてその方向に視線を向ける。窓の外は、未だに見慣れていない、閑静な旧街道が見える。

「寂し……かつたのか。」

ぎくりとして、私は彼の方を見た。未だに視線を窓の外に向けている。

自分の胸に問い掛ける。

寂しい？ずっと、一人でどこか得体の知れない世界に閉じ込められて、一人にも慣れてしまい、何のために生きているのか分からなくなっていた、私。

寂しかつたに決まってる。

「…………うん。」

思つていた以上にか細い声が出た。時に憎しみを、時には哀しみを、時には喜びを具体化した何がが、私の瞼まぶたを熱くしてくる。

「あ…………つと…………。ん。」

彼は言葉に窮したのか、意味にならない言葉を言つている。

「ん。それじゃ何のために俺がいるか分からんな。」

やがてそう言つて来たのを聞いて、ぐすりと顔を上げると、彼は笑つていた。

「俺はバカだからどうにもならんかも知れないけどな。傍に居る」  
とくらいなら……できる……」

そう言つてから、彼は何故か毒でも呑んでしまつたかのよつこ、元氣を濁した。

語尾を濁した。

私が首をかしげていると、彼は取り直したが、言葉を締めた。

「悪い、臭かつた。」

思わず吹き出してしまつ。

もつと別な自然な形で、一いつじうことを望みたかったが、これも  
そう悪くないかもしれない。

私は与えられてばかりだ。チカラからといえ、彼からといえ。  
変わりたい。

どこか緊張した面持の神楽君と共に、私たちは学校への路についていた。道を越えるに連れ、周囲を歩く高校生も増えていつている。私はてっきり、家が別なら登校も別々かと思っていた。もちろん、偶然出会ってしまったならば、一緒に行くことも有り得るが。

一応、家を出るときにドアをノックして確かめたものの、居なかつたので私はそうだと思って、病院から出た。しかし、そこには焦りを表情に鏤めた神楽君<sup>ちづは</sup>が立っていたので、私は自分の考えを恥じた。

彼は待つていてくれたばかりか、待たずに行こうとしてすまんかった、と謝ってきた。私はどうしたらいいのか分からず、ただ戸惑つてあやふやな返事をしてしまった。なんと言つていたかは覚えていない。

そういう次第で、私と神楽君は肩を並べて歩いている。周囲から好奇の視線が遠慮なく私たちを舐めまわし、恥ずかしくなつてつい視線を彼から背けてしまう。

私たちの間に大して共通する話題も無く、ただ沈黙に流れを任せしんみりと歩いている。

「……そういえば、ギターに心当たりがあるって言つてたけど、誰？」

「ん？ あ、ああ……。」

彼は意表を疲れたように、目に焦りを浮かべたが、すぐに取り繕つていつもの表情に戻した。

彼の手には、私が言つたとおりに黒い手袋がはめられており、義手は完全に隠されている。あとは、馴染むまで鳴り響くモーター音などをうまくやり過ごすことができれば、これから決してバレることはないだろう。

「同じクラスの奴だ。確かにんつたつけか……目立たない奴なん

だよな。木島とか言つたか。あんな弱そうな奴が、ギターなんてやつてるんだなあ、つて思つたから印象に残つてるんだ。」

「へえ……。」

私は外見が弱そうで、ギターをやつていると言われて、ぱつとイメージは思い浮かばなかつた。

そういう類の楽器をしてる人というのは、見た目が弱そうではないというのは、ただの私の先入観。そういう人だつて居るだらうし、腕だつて立つかもしれない。

私は少し反省した。

「あ、おはよー」

「お、おはよー……」

笑顔で挨拶をしてくれる真利に、私もぎこちなくだけど挨拶を返す。まだ馴れない。

それなりに余裕をもつて来れたらしく、まだ始業まで時間がある。彼とクラスは大分離れているらしく、下駄箱の時点で別れることとなつてしまつた。惜しいとかそういうわけではないがもつたいないな、と私は矛盾した思考を抱いてしまう。

彼は先週の後半辺りから学校に行つていない。目覚めたのが土曜日だつたから、木、金と休んでしまつたこととなる。無断で。

うまく私から弁明できればよかつたが、肝心なときにチカラは働かないらしく、彼に言い訳を上手くするように言う事しかできなかつた。

勝手に問題を押し付けて、後は知らん振りしている。そんな風に彼に思われたくなかったが、そう思われても仕方が無い。

しかし、こうして彼に嫌われたくないと思うのは何故なのだろうか。いくら見張る必要があるといつても、あの創部の誘いを断らなかつたのだろうか。私の中で答えは出ない。

私は寂しかつた。今、もう一度彼に真正面からそう訊かれたら、私はそう答えることになるのだろうか。

私は首を振った。真利は続々と登校してきた友達と楽しそうにしゃべりをしている。

嫉妬というよりは……憧れ。尊敬。畏敬。いじい

私は普通の少女。世界と隔離されても尚、人との繋がりを強く望んできた。

答えが出ない。私は何を求めているのか。何を畏れてあの輪に入ることができないのか。

私には……記憶がない。

「今日はお弁当持つてきた?」

「え……。あ……。」

どうもひっかりしていて、忘れてきてしまつ。注意力の問題か、はたや記憶力の問題から自意識の問題か。

真利が、困ったような顔をした。びつせなら笑つて欲しいといつたが、ここが彼女のいいところ。

「あ、と……今日は大丈夫。お金持つてきたから。」

「うん、それなら良かつた。」

彼女はそう言つて笑つた。清々しい、見るものの気持ちを和ませる。

「それじゃ買つてくれるから……。」

「うん、行つてらっしゃい。」

私はその言葉に、自分でもわかるくらこぎこちない笑顔を返した。

中庭に置いてるかのようにある、技術室。元々、倉庫だつたらしく、使えるほど整備がなされていないのだとか。周囲と比べて、大分前からあつたのか、木の色が露出し、年季を感じさせる。

放課後は陸上部などといった運動部がこのあたりを占領するらしく、放課後は地面を蹴る音がやかましく聞こえる。

でも昼休みでは、屋上の人気には勝てなく、そもそも昼を食べるところではないので、閑古鳥が鳴いている。

気休めに植えられたのか、一本だけ隔離されたように生えている木に背中を預け、購買部で買つてきたあんぱんを頬張る。こしあんとつぶあんの中間、新しい感覚という宣伝文句が目に入つて、そここの値段だつたから買つてみた。中途半端に溶けきらなかつた、カレーのルーが入つたカレーみたいな感じで、そんな美味しいとは思わなかつた。それでも人気なのだから、私の舌が肥えてしまつたのだろう。

これを買ったお金に関してだが、どうしようも無くチカラをして作つてしまつた。どうしようもなく犯罪だが、ここは生きるためにはしょうがなかつたから……なんて言つても单なる言い訳になつてしまふが、百円玉を量産した。銅とニッケルを四対一の割合で混ぜた化合物が原料だから、チカラを使って用意に作ることが出来た。酸化等での変色も研究し、同じ製造年ばかりのものではなく、色々と製造年を鏤めた。<sup>ちいは</sup>これで、そつそうバレることはないはず。

「あ……」

ペシャツとあんぱんが地面に叩きつけられて割れた。中身からぐでんとした餡<sup>あん</sup>が顔を見せている。

特に、あんぱんが私の手から飛<sup>と</sup>ぶよつなイベントは起きていない。いつものドジだ。どうも考えごとをしてしまつと、こう注意力が分散されてしまう。

私は神楽君が来る前にと、慌ててあんぱんの残骸を拾い集めて、木の裏に埋めた。もつたいなかつたが、ああなつてしまつたのを食べるなんてはしたない事できるはずもないし、木の根元に埋めておけば、バクテリアやらが分解をして木の養分になる。この木に生きる意志があるならば、無駄にはならないはずだ。

私がこうして、閑散とした技術室の裏に昼休みに居るのは、朝、神楽君から頼まれたからである。どうやら、そのギタリストやらをここに連れてきて、勧誘するらしい。

なんだかその光景を第二<sup>さん</sup>者に見られたら、なんか誤解されそうで私は怖かつたが、目を燐々とさせてこの計画を話す彼を見ていると、

どつにも異論を唱えることができなかつた。

暇を持て余した頃、彼は一人の男子生徒を連れてやつてきた。

なるほど、彼が言つていた氣が弱そつを、絵に描いたよつな少年だつた。田は忙しなく泳いでいて、背中は怒つた親の前にたつ子供の様に丸められてゐる。

私が彼らの方に走つていふと、彼は私の存在に気づき、瞳孔を縮ませる。見た目に反さない性格らしい。

「話つて言つのは……もつとリラックスできないか？」

神楽君は私の紹介を置いて、いきなり本題に入る。時間も時間なので、必死なのだろう。

彼の言葉が示す通り、彼は猛獸に食われる寸前の動物の様におびえているといふか、動搖している。平静を保つてゐるようでは、目が一回転しそうなほど泳いでいる。

ちらりと神楽君が私を見た。すぐに視線を戻したが、それが何を意味するのかよくわからなかつた。

「お前部活入つてないよな？」

木島君は、首をすぼめてぶんぶんと振つた。肯定と受け取つて、俺は安堵し続ける。

「あと、ギターを弾けるんだつたよな？」

木島君は首を伸ばしてがくんがくんと首を縦に振つた。いちいち動きが大きくてやりにくいくらい。

「どんぐらじからやつてる？」

「中学のとき部活でやつてた……。」

神楽君の目に感心の色を映された。

「実力はどんぐらいかいえるか？」

「……コンクールで銀賞とつたことがある……。」

神楽君が驚いた反動で咳き込んだ。それをみた木島君はびくつと身をすぐませる。正直、私も驚いた。神楽君の反応に。

神楽君は、なんとか体裁を取り戻し、話を続けよつとした。

「それじゃあ訊くんだが……。」

と言つた時、嫌な工事現場で鳴り響くようなモーター音が鳴り響いた。音源は、神楽君の左腕……義手だ。

くらりと、体が軋むような嫌な感覚を覚え、慌てて体に力を入れて持ちなおす。

神楽君は慌てて、それでも冷静な顔つきで木島君の死角で左腕を拳骨で殴つた。途端にモーター音が止まる。

私は初めてだつたが、もしかしたら、慣れているのかも知れない。「い、今のはなんでもない！そ、そうだ。閑古鳥の鳴き声だ！今は！」

怪訝そうに、口端を緩める木島君に神楽君がそう言つて言い繕う。冗談めかしたことを言つて、心に隙を持たせて話の軸から田を逸らせようとする、何気に上手い作戦だ。閑古鳥の鳴き声で騙される人はそう居ないから。

「木島……頼みがある。」

いつもの様子に戻つた木島君を見て、神楽君が話を元に戻した。

「一緒にバンド部を作らないか？」

また、木島君の目が驚いたように見開かれた。一拳一動が大袈裟で、真面目に接すると気疲れしそうだ。

「……い、え、本当に？」

木島君の返事を聞いて、私は眉をひそめた。どこか違和感がある。逃げ腰だった腰が、何かを見据えるように……目的が見つかったように据わったような気がした。

「うん。神楽君と私と貴方で。作らない？」

一応、打ち合わせどおり釘を刺す。

六感という不確実な要素での勘だけど、こう言わなくとも彼は承認するはず。でも、神楽君に不審に思われてはいけない。

「……障りが無いなら……是非。」

おずおずとそう言つた。

神楽君は、創部確定と決まって嬉しいのか、目が逝つている。

私は、急に変わつた木島君の態度に不安を覚えていた。

彼が態度を変えたのはモーター音が聞こえてから。  
もしもそなならば、神楽君に何か良くないことが起きる。

「おっしゃ一決まりだつ！」

神楽君は、上ずつた声でそう言つた。私はそれを聞いて、今抱いていた疑問を忘れて思わず顔を綻ばせかける。

「……でも顧問は……？」

木島君が言つた。

「顧問は適当に探せばいいだろ。どうせ部活持つてない教師も多いだろ。」

神楽君は、樂觀的に言つ。事実そうかもしれない。

「でも、ボーカルなしで大丈夫？」

私は、疑問を忘れて目の前にあることに専念しようとした。それ以前に、花形のボーカルが居ないので、話にならない。私は首をひねつてそう訊くと、神楽君は少し考えたような顔になつたがすぐ元に戻る。

「別に俺たちが交代でやつてもいいし……木島は無理そうだけど。」  
ちらりと、神楽君が木島君を見やると、彼は首を横に振つた。ちなみに私も彼に同意だ。

「まあ、希望者でも募つてオーディションでもすればいいさ。」

彼がそういったので、私はそれでいいかと合点を打つた。

「そんじゃ、戻るか。」

神楽君は、そう言つと木島君を促して教室に戻ろうとした。私もそれに従う。

「ちょ、ちょっと僕用があるからわ……先行つてくれる……？」

そうしようとすると、木島君がそんな風に言つた。それを聞いて背中が強張るので抑えられない。

「用？」

神楽君が怪訝そうに訊いた。木島君が頷く。

「先生に用事頼まれてたの思い出して。」

「そうか。」

神楽君は、気持ちが昂ぶつているのか、大して不審そうにせず、片手を挙げて立ち去った。

結局のところ、用があろうとどうであれ、校舎に戻るために同じ昇降口に行く必要がある。だから、途中までは同じ道を辿ることになる。

私と木島君は、少し距離を置いて神楽君のあとを追いついて歩く。  
「星山…… もんだつけ？」  
別れ際に、いきなり木島君に声を掛けられて思いつき驚いて舌を噛んでしまった。

「ふあ…… な・・に？」

「あ、えとさ……」

木島君は、言ごづいたりやつに視線を逸らした。  
そして。

「神楽君から田を離さないこほうがいいかもしねないよ。」

「……え？」

私の思考が混沌とする。

「そ、それだけ……」

「…………うん…………」

彼はそれだけ言って、職員室の方に歩き出した。  
どこと知れぬ焦燥感が私の心を支配した。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0627f/>

---

義手と練成の問題

2010年10月9日22時17分発行